

小学校高学年における走攻守の戦術的判断を促す

ベースボール型教材の提案とプレーの傾向

高橋 明日美 (千葉大学)

1. 目的

本研究では、「走塁」を含むベースボール型の教材を小学校高学年段階の児童を対象に実践し、単元前後の児童の戦術認知の変化、プレーの傾向をつかむことを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者：千葉県 C 小学校第 5 学年 35 名。
- 2) 検証授業の詳細：令和 4 年 5 月 17 日～6 月 17 日、単元「ベースボール型」(1・2 打ちっぱなしゲーム、3・4「ゲーム 1 (走者なし)」、5～8「ゲーム 2 (走者あり)」であった。
- 3) 分析方法：ベースボール型への意識調査(好嫌に関する 5 件法の調査/運動としてのかわり方調査)、単元前後の戦術認知テスト、毎時間の形成的授業評価、第 3～8 回のパフォーマンス評価法(GPAI)に基づく分析。
- 4) 統計的有意差は 5%未満と設定。

3. 結果と考察

1) 意識調査

単元前後に実施した意識調査の結果、ベースボール型に対する回答が 3.61 (±0.99) から 4.36 (±0.73) へと有意 ($p<0.05$) に増加し、「観戦」「余暇でのプレー」等、ベースボール型へのする・みる・知る関わり方についての好意的な結果が増加した。本教材がベースボール型に対する興味を引き出すことができたと考えられる。

2) 戦術認知テスト

戦術認知テストの結果を各問 1 点の合計 5 点として分析したところ、合計得点の平均値が 2.57 (±0.81) から 3.38 (±0.80) へと有意に高くなった ($t=3.442, p<0.01$)。特に守備における「打者・走者の進塁を防ぐための送球先の選択」、「攻撃における守備隊形にあわせて出塁しやすい打球の方向と強さ」を選

択する問いにおいて正しい状況判断を選択できるようになる児童が増加した。このことから、本単元における経験が戦術的思考を引き出すものであったと推察される。

3) パフォーマンス評価法(GPAI)

単元後半にかけて走塁における判断ミスの割合が減少したことから、「進塁するか否か」という走塁場面の課題は児童に適していたと考えられる。しかし、認知テストでは正答を選べたものの、実際のプレーでの守備においては状況に合わせて送球する場所を判断する力は完全に習得できたとは言及できなかった。頻度こそ少なかったが、単元後半になると適切なプレー選択により打者をアウトにすることができた様子が見られたことから、第 5 学年児童では「走塁」を含む守備における高度な戦術的判断も不可能ではないことが推察された。また、「打球を追う」以外のプレー選択が単元後半にかけて増加したことから、ベースボール型の種目特性であるチーム内での連携や分業の意識が芽生えたことが推察される。

4. 結論

分析の結果、本教材が走・攻・守の各場面において児童の戦術的判断やチーム内での役割分担に関する思考・判断を引き出したことが示唆された。難しいとされてきた「走塁」を含む教材でも、下位教材の実践の仕方次第で小学 5 年生にも実践可能であることが推察された。

しかし、戦術的判断はできるが実際の状況下では技能として発揮できない、といった事例が認められた。よって、今後は、児童本人への聴き取り調査を取り入れ、思考判断と技能の関係性について研究継続していく必要性が見いだされた。